

| | |
|------------------|---|
| Title | 科学的社会主義は如何にして可能なりや(下) |
| Sub Title | |
| Author | 平井, 新 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1924 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.8 (1924. 8) ,p.1153(89)- 1167(103) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 雑録 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240801-0089 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

識を前提とするものなりとするも、而も階級闘争は常に依然として一個の闘争たるを失ふものではない。而して此闘争の原因は就中一階級、一黨派の利害の貫徹に係はるものであつて、彼等の利害が認識論と調和するに非ざる限り、其は單なる認識論の相違に係はるものではない。かくて社會主義は經濟的方面に於ける労働者對有産者の闘争の原因の單なる記録的總體ではなく、寧ろそれ以上のものである。社會主義は教義としては闘争の理論であり、運動としては特定の目的——資本主義的社會組織の集産的經濟への變化——に對する闘争の總括である。這般の目的は寧ろ其の實現のために闘争する所の有意の目的であつて、單に理論を前提とする行爲ではない、蓋し斯の如き行爲は多少乍ら宿命的なるを免かれないからである。社會主義は特定の未來圖を其目的として提起し、且つ現在に於け

る其態度が此目的に密接の交渉を有する程、それは必然、空想の要素を含むに到る。乍併余の見解は、社會主義の努力の目標は不可能のもの、非眞理的のものであると謂ふのではなく寧ろ單に社會主義は其自身の裡に觀念的理想主義の要素並に科學的に論證し得ざるもの、確立し得ざるものを包含せるものなる事を言はんとするに在る。是に問題となる科學——社會學——は嚴密科學が特定の諸現象を決定すると同様の確實性を以て、社會主義が其實現を努むる社會組織の必然的到來を豫想し得るものではない。そは纔に將來社會の諸條件を發達せしめ、その眞實性を大體に於いて評價し得るのみである。

社會主義の裡に、絶對的精確さを以て知る可からざる要素の内在することは、之を以て直ちに、社會主義理論の一缺陷と看做す事は出來ない。嚴密科學が其の進歩のために、假説を必要

とするが如く、社會の進歩を其究明の對象とする社會學も亦未來に對する假說的進歩の豫測を必要とする。而て斯の如き豫測は常に或る程度迄空想に終る。既に述べた如く、余は此空想なる語を極度の夢幻的なる、到底實現す可からざる空想と同義に用ひない。空想なる語は屢々此義に解せられ、而て又果して此義にのみ解す可きものなりとすれば、かの十九世紀の三大空想家と稱せられる、近世社會主義の先驅者、ロバート・オウエン、アンリー・サンシモン、シャルル・フリエーの如き人々に對して此語を結び付けることは、極めて不當の譏を免かれないであらう。

エンゲルスは前掲書に於て之等の社會主義者に對する淺薄なる亞流的批評——例之當時の論敵デューリングの批評の如き之である——に對して銳意彼等の爲に辯護の勞を惜まなかつた。

エンゲルスは彼等の思想に敬意を表した。事實今日に於いても吾人は尙之等の所謂空想家達より多くを學ぶ事が出来る。吾人は又眞實の力並に典型に對する犀利の眼識を備え、生命力を創造し、重要な諸發見を企てる所の創造的空想並に想像力の存在を疑ふものではない。

現實主義者を、狹量な、唯だ刹那に生き、眼前の事物に汲々たる俗物の謂に解せず、單に時勢に迎合せる時人にも増して、時事問題の根底を究め、人間行爲を規定する諸勢力を洞察する犀利の眼識を有する人々の謂に解するならば、オウエン、サンシモン、フリエーの如き人達は當に當時に於いて著名なる現實主義者であつたと言ふ事が出来る。彼等の理論並に實行案は、今日に於いては、單に大なる純情の發露であり、空想的のものと看做され、而も當時に於いても、尙社會の諸關係諸勢力に殆んど適應しないもの

先づロバート、オウエンに就て言へば、彼は當時の最も進歩的哲學に對する深き研鑽と、産業上に於ける技術的變化の社會的影響に對する觀察との結果、唯物史觀と略、同様の歴史觀に到達するに到つた。彼が反覆力説に努め且つ彼の社會改良案の出發點である教義——人間の性格は、彼のために形成せられるものであつて彼に依て形成せられるものではないとの教義——は多少の誇張の嫌あるにしても、尙ほ根本に於いては合理的である。此教義に依れば人間の性格及行爲は生來の資質及び其の環境に依つて規定されるものである。此教義はかのマルクスの唯物史觀の根本となれるものである。既に一八一五年オウエンは其著書の中に工場工業の普及が如何に深き變化を國民の全社會生活に及ぼすものなるかを述べた。

經濟に關するオウエンの提案は、大體に於いて、最も進歩した經濟的形態としての大産業から出發するものであり、彼の集合的社會——内地殖民と呼ばれた——の組織計畫は、當時に於ける技術の狀態に基く嚴密なる計算を根據とするものである。之等の提案はその努力する理想に比して不完全なりしたために、今日に於いては、空想的であると看做されて居るが乍併當時に在つては夢想的空想から遙かに進歩せしものであつた。オウエンは常に科學的認識を覓めて罷まなかつた。而て彼の門人等に依つて設立された文化學校は、彼等に依つて科學會館とさへ呼ばれた。當時の公的經濟に對するオウエンの批評は個々の問題にも及んだ。而てオウエンの門人等は彼の論述を基礎として市民的經濟學の批評に貢獻する所大であつた。

フリエーも亦オウエンと同様に社會改良に科

學的根據を興えんと努めた。彼は自己の世界哲學の建設並に遠き將來に屬する進化の描寫に際して、一切の假説に對する辨證的の概念的遊戯のために不羈奔放の空想を肆にしてゐるにも拘らず、歴史科學及び社會科學に對し有益なる思想内容を加へた彼の業績は遽に之を没する事は出來ない。衝動と感情とに關する彼の學説に於いて、彼は、人間靈魂の炯眼なる研究者として現はれてゐる、而て一切の衝動に自由活動の餘地を興え、全體の福利を増進せしめるため、先づ其着手として勞働の組織を愉快のものたらしめ、之を適宜に分配して各、其の性向に最も適したる人々をして之を行はしめんとする彼の見解は依然として價値あるものである。民主的農業組合に關する彼の論文の批評的部分は當時の佛蘭西の經濟狀態の真相を巧に曝露してゐる。該書の積極的部分に展開されてゐる大組合——

工業經濟、農業經濟、家内經濟を結合す可き——の建設に對する提案は、オウエンの内地殖民よりも一層、大經濟的經營方法を採用するものであつて、フリエーは該經營方法の利益を力説して罷まなかつた。

サン・シモンの場合に在つては、不可能のもの、不確實のもの、即夢想的思索の謂に用ひられてゐる所謂「空想的」の要素を發見することは困難である。尤も彼の空想は彼を驅つて現實の彼方に赴かしめ、其實現、實行共に遙か遠き未來に屬する所の思想を抱かしめた。乍併彼の空想の根底には科學的研究並に科學的推論が横はる。吾人は彼を以て近世社會學の父と看做す事が出来る。後年彼の門人であり、協力者であつた、オーギュスト、コムトが方法論的に發展せしめ且つ包括的體系として齎せしものも其の思想的内容から觀る時は、大部分は既にサン・

シモンに於いて發展せしめられしものであつた。科學としての政治學の概念を擴張して、之に全體の社會的狀態をも包含せしめんとする要求、社會關係即ち財産の分配、生産秩序、階級構成は其時々の國憲の特定基礎を形成するものなりとの思想、人類文化の發達階段は順次、神學的、形而上學的、實證的、科學的思考方法の各階段に分類されるこの思想之等の思考方法と當該社會秩序との間には因果的關係の存するとの見解——之等の諸要求並に諸見解は、悉く其源をサン・シモンに發してゐる。社會狀態を分割して批評的狀態の時代及び有機的狀態の時代となしたものは、サン・シモン及びコムトであつた。彼等の觀る所に依れば有機的時代とは、社會秩序の基礎と其の制度との間に調和の存する時代であり、批評的時代とは、社會秩序の基礎となる諸思想が彈劾せられて、其拘束力を喪ひ新

ロレタリエルの概念を以てした。

新基督教を建設せんとするサン・シモンの要求は彼の學說の科學的性質と決して根本的に相剋するものではない。蓋し這個の基督教は何等獨斷的宗教ではなくて、寧ろ一種の感情宗教、理性宗教である可きであるからである。コムト(彼は其天才的なる點に於いては先師に一步を輸するも、其方法論に於いては先師に優つてゐたが、彼の方法論も亦殆んど兒戯に類する術學に終つてしまつた。)は名目上舊來の啓示宗教との關係を斷つて、彼の新教義を「人類の宗教」と呼んだ。かくして必然、科學的思索と宗教的感情との間に存する二元は排除されてしまつたのである。

今吾人が之等の所謂三空想家の教義をマルクスの學說とを比較對照して觀ると、後者に在つては、前者に於けるよりも著しく科學的要素が

階級が擡頭して支配階級と敵對して遂に此敵對が益、極端となり、舊秩序は顛覆されて、新秩序が起り、變化せし社會生活の基礎に適應する新宗教が宣明され、之に依つて社會は再び有機的狀態——社會的綜合——の局面を打開するに到る所の時代である。新時代の社會に於いて、其の標準的要素の地位に昇る階級は、サン・シモンに依れば原始的には産業階級なのである。此階級は、當時の佛蘭西の狀態に當符めると、産業的企業家及び労働者の謂であると解せられる。而して産業的企業家は主人即ち産業の管理者であると看做された。コムト及び彼に依つて建設された實證學派は此思想を固執したがサン・シモンの正統派は産業即ち生産者の概念を推し進めて之を労働者の概念に變へた。而してサン・シモン派中の急進派は更に労働者の概念に更に百尺竿頭一步を進めて、之に代ふるに

基礎づけられ、展開されてゐるのを認めるが、乍去總てが必ずしも科學ではない事、前者と同様なことを認める。傾向と意志とに依つて導かれた空想に委ねられた範圍は極めて狭少となり、其傾向も亦著しく限定されてゐるに拘らず、而も空想的要素は悉く除去されてはゐないのである。エンゲルスは前掲書に於いて兩者の相違の特徴を指摘して謂ふ、オウエン、サン・シモン等は當時の尙ほ未熟なる社會關係に適はしく、本質的に社會主義體系の發明者であり、社會的新秩序の完全なる體系を頭腦中より發明し之を外部より宣傳及び模範的實驗の方法に依つて社會に強制せし所の思想家であつた。乍併マルクスの學說に依れば、社會變革の手段は頭腦中より發明せらるるものではなくて、寧ろ頭腦を透して現行生産の物質的事實の裡に發見せらるる可きものであると。此事はそれが之等の所謂三社

會主義者及びその理論的事業を繼承する學派よりマルクス及びエンゲルスに到る發達經路の大體の傾向を示すものとしては、全く當つてゐると言つていいのである。事實に於いて此發達經路から觀れば、發明對發見の關係は寧ろマルクス及びエンゲルスに取つて有利に押し進められてゐる。乍併余の觀察する所に由れば此章句は、二つの方面から誇張の嫌あるを免かれない。先づオウエン、サン・シモンの側から見ると彼等の場合に於いて、寧ろ發見に重を置いたにも拘らず、「發明」に對して「發見」の有する地位は外観上極めて不利に示されてゐる。次に近世社會主義は余の見解に従へば、吾人の全く有しない、又有することの出來ない「發明」の自由を宣言してゐる。マルクス及びエンゲルスに依つて確立

された社會主義とオウエン、サン・シモン、フリーの體系との相違點は社會主義社會を建設す

るための諸勢力並手段に對する評價の相違に存する。吾人は此處では、何故にマルクス及びエンゲルスの社會主義がサン・シモン、フリエト、オウエンのそれに比して著しく進歩してゐるかを長々と説明するの要はない。乍併マルクス及びエンゲルスの社會主義は理論として斯の如き諸勢力認識の文字通りの科學ではない、寧ろ彼に依つて認識せられてゐる所は手段其者の發明ではないが、而も其使用の形態及び方法に關する特定の發明である事は疑ひない。此處では詳細に之を論證しない、唯だ余の確信として次の事を表明すれば足りる、即ち此點に關するマルクスと所謂その先蹤者との相違は全然相反する見解の相違ではなくて畢竟程度の相違であると言ふ事を。

再び吾々の議論の發展の跡を辿るとにする。

鬭争的運動としての社會主義は科學に對し必ず

しも全然非傾向的に對立するものではない。それは寧ろ事物の性質に左右される、蓋し社會主義の目的は科學の要求を實現することに存するものではないから。進化的要素並に進化的法則の科學的認識の價值評價の問題に於いて、社會主義は其手段並に方法を撰擇する場合に、その根據を科學に求め其時々を科學の基礎に依つて測定せんと欲する。此は社會民主黨に一般に知られてゐる原則である。従つて問題は唯だ一政黨の本質が果して純粹科學の前提たる理論的公正を社會主義に與え得るものであるか而も如何なる程度まで之を與ふるものであるかと言ふ事である。而て之に對する解答は次の如くである——即ち此公正の程度は、一つにかの客觀的認識としての科學と、政黨の綱領並に學說との間に存する限界關係の明否に依憑するものであると言ふ事である。

英國の政治家且つ哲學者たるベーコンは其論文の一つに於いて謂へらく、國家的事件と諸般の科學との相違點は後者の問題とする所が變化と運動であるに對し、前者の問題となるものは權威と權勢であると言ふ事に存する。專制的王政の擁護者たるベーコンの權威に對する見解如何は吾人の今問ふ所ではない。而て吾人は又此點に於いて、此語の狹義たる其時々を國家制度に關し何が最も望ましきものなるやを研究するの要は無い。乍併吾人が今事實有るが儘の事物を念頭に置き此國家的事件に代ふるに現狀の下に廣義の國家的事件の概念に屬し且社會團體に在つて重大なる役割を演ずる所の政黨を以てするときは又前記ベーコンの試みたる對立は尙ほ今日に於ても適用される。政黨はそれが自家の見解を表明する點に於いて權威的性質を有する點に於いて、近世的國家に優れる事數等である。

彼等は一定の教義と要求とを代表し、之を實現せんと欲する。而して之等の諸教義並に諸要求を極力代表するためには一定の期間中黨員等が之等の諸教義並に諸要求を遵奉する事を必要とするものである。多少誇張の嫌は免れないが、余は、此關係に於いて、かのイスラムの確固不動の態度、並に今より凡そ三十年前一社會主義機關がその保持する學說に對して、かのカトリック教會が羅馬法王に與えたと同様の不可浸性を與えし事實をば大體に於いて是認するものである。乍去今日の事狀は此當時の事狀とは全く其趣を異にしてゐる。吾人の問題となるものは斯の如き信仰上の強制、良心上の強制ではない。吾人の問題となるものは唯だ黨員の政治的態度を拘束するものとしての黨派の決議の是認であり、黨派の根本的要求並に教義に對する黨員の加盟である——之等二個の條件無くしては

堅實なる政黨生活は永遠に成立する事は出來ない。此意味に於いて吾人は一定の忍従を要求する政黨の權力を是認しなければならぬ。吾人は今や此權利を共有するが故に政黨の領域と科學の領域との嚴密なる限界を必要なりと看做すものである。而も之に依つて吾人が科學の下に何を解す可きやの問題も明白となる。

科學とは、此概念を嚴密に解する時は、取も尙さず系統的に整序された知識の謂である。知識とは、事物の真正の本質並に諸關係の認識の謂である。而して認識の地位に従つて常に繼ぎ唯一の眞理のみ存在するものであるから、各々の知識領域には又唯一の科學のみ存在する。所謂嚴密科學に關しても此事は一般に認められる。今日何人も自由的物理學、社會主義的科學、保守的化學を口にするものは無いであらう。而らば、人間史、人間制度の科學は之と別問題で

あるであらうか？ 余は之れに賛することは出来ない。かくて自由的、保守的及び社會主義的社會科學とは没理である。吾人が若し斯かる見解に逢合した場合に、少しく此見解を精査すれば、之等の見解が、單に科學的に概括された理論と科學其者の間に存する差別を看過し、且つ過少視し加之、理論或は教義の結構が單に形式上科學的推論の要求に適應せるの故を以て直ちに之を科學なりと速断せし事實を發見するであらう。乍併科學的形式は、縱令一學說の諸前提並に目的が傾向的認識の域外に存する要求を包含する場合に於いても直ちに這個の學說を科學と化するものではない。而して此事は社會政治理論についても、社會政治教義に就いても原則として當符るものである。

社會的並に政治的教義と各、之に該當する科學との相違點は後者の門戸が開放されてゐる場

合に前者の門戸は閉鎖されると言ふ事に存する。社會的政治的教義は特定目的の支配の下に立つ、而して此目的に於いて問題となるものは認識ではなくて、意欲である、而して這個の目的は縱令或る點に於いて、新しき認識の餘地を許す場合に於いても這個の學說に既成と固定との性質を與ふるものである。乍併科學的社會學は決して其門戸を閉鎖されない。蓋し其對象は社會であり、生命ある有機體であつて此有機體に適用される法則に關しても究局の永遠の眞理と言ふものを是認しないからである。乍去諸科學が各、其確固たる所産を有することは言ふを俟たない。不斷の變化の法則を、恰も諸般の科學は一切の確定された經驗並に認識論の充分なる考慮を拒み、且つ推論方法に多少の自由意志を許容するものであるかの如く解してはならぬ。寧ろ之に反して、其任務とする所は、合法

的必然性を發見すると云ふ事に存する。此處にこそ科學の重要な意味は存する。究明の對象となる諸現象並に諸過程の窺局の原因並確定された諸現象の窺局の結果に關しては諸般の科學は均しく不可知論的なのである。彼等は自家學說の永遠の結論を識らない、寧ろ新事實に憑る不斷の擴張と補正との餘地を留保する。

此意味に於いて、社會主義に科學的基礎を與えんとの尊敬す可き願望を有せし、かのブルドンは嘗てマルクス宛の書簡——その中に於いてブルドンは嘗てマルクスに著作の出版を報告した。マルクスは「哲學之貧困」なる有名なる著書中前記ブルドンの著作を批評した(余は會合の際よりも多少詳しく其一部を此處に引用するにしよう)——中に於いて謂ふ「吾人にして社會生活の法則、此方法實現の種類並に方法、此法則發見の方法を究明せんと欲するならば、吾人は、一

切の先驗主義的獨斷を破毀したる後、國民に對して獨斷主義の說法を神命に誓つて慎まなければならぬ。吾人は決して一問題を更に究明の餘地なき程遺憾無く論じ盡されたものは看做さない。だから吾人が最後の議論に到達したならば、必要に應じて、吾人は再び雄辯と批肉とを初めよう」と。

『吾人は決して一問題を究明の餘地なき程、遺憾なく論じ盡されたものは看做さない』——此は實に、社會主義が科學たり、科學たらんと欲する限り、之が消極的標語となるものであらう。余は、社會主義は文字通りに科學では無く、純粹科學ではなく純粹科學たり得るものでない事を論證した。既に社會主義なる概念其者が此事を拒否する。主義は科學ではない。主義とは觀念方法であり、傾向であり、思想要求の體系であつて毫も科學ではない。總て純粹科學の基石

は經驗であり、それは集合的知識の上に建設される。乍去社會主義は來る可き社會秩序の學說である、従つて其の本質は嚴密なる科學的確立から遠ざかる。

遮莫社會民主黨に依つて代表されたる社會主義と科學との間に極めて密接なる關係の存する事は疑ふ可からざる事實である。社會主義は其根據を科學の倉庫に仰ぐこと極めて大である。社會主義は總ての社會的諸黨派中科學に最も近接せるものである。蓋し社會主義は新興階級の運動として、一切の他の政黨或は運動よりも現存事態の批評に於いて自由であり、而も此批評に於ける自由は科學的認識の根本的條件の一つであるからである。社會は生命ある、不斷に進化せる有機體であり、而して吾人の目前に行はれてゐる此進化に最も望を囑せる政黨或は階級が他にも増して一入認識の進歩に興味を有する

ことは理の當然である。

此利害は社會民主黨に對しても或は社會主義に對しても既に存する。蓋し彼等をして、社會的進歩を促進す可き手段を發見し、且つ社會的進歩を妨害遲滞せしむる所の手段を避けしむるものは實に社會的關係の認識であるからである。社會主義は前述せしが如く、常に或る程度まで意志の問題である、乍去決して自由意志の問題ではない。社會主義が意欲された目的を達成するためには、其嚮導的指揮者として社會有機體の諸勢力、諸關係及び社會生活に於ける因果の科學を必要とする。

科學的社會主義の名稱は稍々もすれば、社會主義は理論としては科學たらん事を欲するものであり、且當然科學たる可きものであるかの如き謬見を誘致する。此見解は常に誤謬であるのみならず又社會主義に對して少からざる危険を

及ぼすものである。蓋し此見解は動、もすれば科學的判斷の最も肝要なる條件の一たる科學的公正を社會主義より奪取せんとするものであるからである。既存の社會主義學說に於ける總ての教義は現在の形態の儘にて、直ちに社會主義的論證の聯繫中の代位し難き因素をなすものとされてゐる。従つて此事は又社會主義が理論と實際の間に保持せんとする關係に於いて、實際方面に悪影響を及ぼしてゐる。吾人が科學的社會主義なる名稱を拋棄して、寧ろ他の名稱——社會主義は科學的認識の基礎の上に建設せられるものであり、且つ此科學的認識の基礎を以て、指針を與ふる要素と看做し、而も社會主義は排他的に科學たらんとするものであり且つ其自身常に他に對して封鎖的態度を採らんとする要求を有し且つ之を是認するかの如き見解を排除する所の思想を完全に表明し得る名稱——を撰ば

んと欲する所以も亦此處に存する。此二重の要求に最も適はしきものは余の見解に由れば、批判的社會主義なる名稱——此處に批判とはカントの科學的批判主義の意味に於ける批判である——である。

因に謂ふ、余は此名稱を撰擇し且つ之を總括せし唯一の社會主義者ではない。此名稱を選擇せし人は、マルクス派に屬し、而も種々の點に於いて余と別個の見解を抱ける人——ローマのアントニオ・ラブリオーラ教授である。一八九六年ラブリオーラは共產黨宣言の記念の爲めに獻げたる著書に於いて謂ふ、マルクスの共產主義に對して最も適切なる名稱は「科學的」なる名稱ではなくして、「批判的」なる名稱である。蓋し「科學的」なる名稱は屢々全く思慮なき方法に於いて用ひられてゐるからである。

「科學的」なる副名に對し異議を差し挾む所以

のものは決して單なる出來心、或は字義拘泥からではなく寧ろ社會主義學說に可及的最大の科學性を與えんとする要求を持するからである。故に科學と社會主義との關係に關する虚構の解釋を避ける事が必要である。之に反して、「科學的」なる概念を或は要求、或は綱領として批判的意義に解するならば、科學的社會主義なる名稱も亦、余に對して、充分正當なるものであると言ふ事が出来る。但し社會主義が自らに提起する此要求たるや、社會主義の意欲に指針を與ふるものは、科學的方法及び認識であると言ふ事を表明し得るものでなければならぬ。

科學は非傾向的であり、事實の認識として一黨、一階級に歸屬するものではない。之に反して社會主義は傾向であり、而て新なるものために闘争する黨派の教義として文字通りに既に確立されたものに結び付くことは出来ない。乍

併社會主義が其實現を努むる目的は、かの近世社會に於ける諸原動力の科學的研究の示すが如く、社會的進化の上に存するものなるが故に、社會主義理論は總ての他の學說に比して科學性の要求に貢獻する所多く、又社會主義の黨派即ち社會民主黨の目的及び要求は他の黨派に比して著しく之に關する學說と要求とに適合してゐる。今余の見解を總括して見れば次の如くである。即ち——科學的社會主義はそれが必要なる限り、即ち、根本的に新なるものを創造する所の一運動の學說から合理的に吾人の求め得る限りに於て可能なるものであると。

(終り)